

古典解釈シリーズ

徒然草の研究

著 人 文 村 峯
光 義 藤 齋

續文堂

徒然草の研究

東京教育大学助教授

峯村 文人

東京都教育庁指導主事

斎藤 義光

共 著

古典解釈シリーズ

績文堂

著者紹介

峯村文人 大正2年長野県に生まれた。東京高等師範学校・東京文理科大学国語国文学科を卒業。東京都立八潮高等学校教諭・小樽商科大学教授を経て、現在東京教育大学文学部助教授。文学博士。著者・論文に「新註国文学叢書 新古今和歌集」「大鏡新釈」「学灯文庫 方丈記・無名抄・無名草子」,「幽玄美の形成過程」「徒然草を研究する人のために」その他がある。

現住所 東京都新宿区西落合 1-281

斎藤義光 大正8年北海道に生まれた。東京高等師範学校・東京文理科大学国語国文学科を卒業。東京都立白鷗高等学校教諭を経て、現在東京都教育庁指導主事。中世および近世文学専攻。著書に「学生のための俳句の鑑賞」「対訳 俳文・俳論・俳句」「最新国文解釈」,論文に連歌・俳諧関係のものがある。

現住所 埼玉県北足立郡新座町西堀八軒 191

古典解釈シリーズ

徒然草の研究

定価 400 円

昭和35年4月25日 初版第1刷発行

昭和40年4月26日 初版第4刷発行

著者

峯村文人
斎藤義光

発行者

石上昭

発行所 株式会社 續文堂

東京都新宿区山吹町81番地
振替東京126073 電話東京(260)2431

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

組版 三美印刷
印刷 工文社
協栄 関山製本

は し が き

「徒然草」という随筆作品は、不思議な古典です。人生の豊かな味わいを教えてくれる本として、江戸時代には、若い女性のお嫁入り道具の一つにまでされていたものでした。明治時代からは、国語教育のたいせつな教材にされて、少なくとも古典を勉強したというような人は、ひとりのこらず、この本の中のおもな文章に親しんできています。また、上級学校国語入学試験問題の材料の宝庫でもあるために、今では、受験勉強に携わる人々のどうしても読まなければならない古典にもなっています。そうして、もともと老境の精神から生まれた作品ですから、若い人々にはちょっと親しみにくいものを感じさせるところがあるのですが、それにもかかわらず、そこに宿っているみずみずしいものが、いつしか心のどこかに深く残って、年がたつにつれて懐かしくなるようなところを豊かに持っているという古典なのです。すぐれた古典というものは、みな人生の深い何かに触れていて、それを読む人々に心のかてとなるものを与えてくれます。「徒然草」は、そういう古典の中でも、とりわけすぐれたものの一つでしょう。それは、作者である兼好法師という人が、人生の真実を、まれに見る鋭さで多面的にとらえることのできた人であり、それをまれに見る筆力で書き残してくれた人であるからです。

今の高等学校で用いられているいろいろな国語教科書を調べてみますと、「徒然草」全段のなかばよりはるかに上まわる段の文章が、どれかの教科書に載っていることがわかって、いままさらのように驚かれます。そのような結果になるもつとも大きな理由が、そのすぐれた文学性にあることはもちろんですが、一つの理由は、「徒然草」の文章が、古典文入門の絶好の場を提供しているからということにあります。わたしたちは、平安時代に、「源氏物語」とか「枕草子」とかいうような和文で書かれたすぐれた作品を持っています。そのうち、「方丈記」とか「平家物語」とかいうような和漢混交文で書かれたすぐれた作品も現われてきました。「徒然草」は、そのいずれの種類の作品に近づく入門書としても、たいせつな位置にあると言えます。そういう性格を備えた作品である上に、短章で完結して

いる段の集合体でもあるのですから、教科書の材料の宝庫として重んじられていることも当然でしょう。

わたしたちは、これからそのような「徒然草」に力を入れて勉強しようとする若い人々への、できるだけ親切な道連れになるようにと念じながら、この本を書いてみました。終始心掛けたことは、古典の読解力・鑑賞力が身につく正しい姿勢を整えてもらうためにはどうしたらよいかということです。読解力がほんとうに身につくためには、文脈が正しく読み取られ、読解したところが、いつも、的確で、だれにもよくわかることばで言い表わされるような学習を重ねなければなりません。また、鑑賞力がほんとうに身につくためには、何よりも、書かれてあることがらを、先入観にとらわれないで、自分の目で読み味わうというような学習を重ねなければならないのです。そういう学習を重ねたら、「徒然草」だけでなく、古文の読解力や鑑賞力の基礎はしっかり固められると思うのです。先人の積み重ねられた「徒然草」の注釈・鑑賞その他の研究文献はおびただしい数にのぼっています。それらのうちの主要なものにはつとめて目を通して、その恩恵を受けながら、今日の研究段階のいちばん標準になるところをはずさないように気をつけましたが、わたしたちの目ざしたところが、この本を読まれる人々にお役に立つならばうれしいことです。

この本の構文・口語訳・鑑賞および解題の部分は主として峯村が書き、その他の部分は、峯村・斎藤が協力して書きました。もっと早く完成する予定でしたが、執筆の途中で峯村が沖縄に文部省から派遣されて中断しなければならなくなったこと、わたしたちのこり性から印刷の組みにかかってからもなお幾月も滞っていたことなどのために、續文堂や印刷所に、また多くの読者の方々たいへんご迷惑をおかけしてしまいました。深くおわび申し上げます。また續文堂の森山光人氏にはなみなみならぬお世話になりました。付記して厚く感謝の意を表します。

昭和三十五年四月

峯村文人
斎藤義光

凡 例

一 本書は、主として、高等学校で「徒然草」を学ぶ生徒諸君のために、学習・受験向きの参考書として書いたものである。したがって、ここに採った章段は、現行国語教科書（甲・乙のすべてを含む）に収められているものを主とし、それに入學試験に出題される著名章段を加えたものである。

二 本文・校異 本文は、もっとも広く用いられている烏丸光広奥書本（慶長十八年刊）により、読みやすいように、文字をあてかえ、漢字はなるべく少なくした。「校異」欄には、もっとも古い写本として重んじられている正徹本との異同を対照させた。

三 読解の手引き 本文を理解しやすくするために、要旨や前後関係や留意すべき点を述べた。

四 構 文 文意を正しく読み取るための参考として、特に注意すべき部分の構造を図示したり解説したりした。主語と述語、修飾語と被修飾語のかかり受けの關係は、「―――」印によって示したが、大きなかかり受けの關係からこまかいかかり受けの關係に及ぶというようにしてある。また、並列の關係にある部分は「―――」印や「―――」印で示し、挿入句もしくは、補説句と見られるところは、「（ ）」印をついたりなどしてわかりやすくした。

五 口語訳 本文を中段とし、口語訳を下段として、対照の便をはかった。口語訳は、もっともわかりやすい口語によって、本文の一語一句を厳密に口語化することにとつとめ、文意を明らかにするためにやむをえず補ったことには「（ ）」印をつけた。

六 語 釈 そのまま本文の口語訳に移すことができるように解釈した上で、文法の基本を身につけることができるようなくわしい説明を加えた。また、人物・引用文その他のいろいろの關係事項の説明は、だれにもわかりやすいようにとくふうした。

七 鑑 賞 できるだけ文章に即した鑑賞を行ない、その上で、批評に及び、思想その他の関連事項に触れていくようにした。

八 参 考 解説・鑑賞などの補いになると考えられることがらを掲げた。

九 研究 最近の入學試験問題の傾向を参考にして、文法力・読解力・鑑賞力を試みるいろいろな問題をくふうして掲げた。解答は巻末に付録として一括して収めてある。

二 解題・さし絵・索引

はじめに解題を掲げ、文中に適宜参考絵図を配し、巻末に索引を添えて学習の便をはかった。

目次

目 は し が き 一

凡 例 三

解 題 九、一六

一 作 者 九

二 書 名 二

三 成 立 二

四 内 容 三

本 文 一七、三五七

一 つれづれなるままに (序 段) 七

二 いでやこの世に (第 一 段) 八

三 いにしへの聖の御代の (第 二 段) 四

四 後の世の事 (第 四 段) 六

五 不幸に愁へにしづめる人の (第 五 段) 七

六 あだし野の露 (第 七 段) 元

七 家居の、つきづきしく (第 一 〇 段) 三

八 神無月のころ (第 二 段) 三

五 文 章 二四

六 諸 本 二五

七 参 考 書 二五

九 同じ心ならん人と (第 三 段) 七

一〇 ひとり灯のもとに (第 三 段) 四〇

一 和 歌 こ そ (第 四 段) 四一

三 いづくにもあれ (第 五 段) 四三

三 神 楽 こ そ (第 六 段) 四七

四 山寺にかきこもりて (第 七 段) 四九

五 人は、おのれをつづまやかにし (第 八 段) 四九

六 折節の移りかはること (第 九 段) 五三

七	なにがしとかやいひし世捨て人の	(第二段)	六〇
六	よろづの事は、月見るにこそ	(第二段)	六一
五	何事も、古き世のみぞ	(第三段)	六四
四	飛鳥川の淵瀬	(第五段)	六六
三	風も吹きあへず	(第六段)	七〇
二	静かに思へば	(第九段)	七三
一	人の亡きあとばかり	(第三段)	七四
四	雪のおもしろう降りたりし朝	(第三段)	七七
三	九月二十日のころ	(第三段)	七九
二	手のわるき人の	(第三段)	八一
一	朝夕へだてなくなれたる人の	(第七段)	八二
六	名利につかはれて	(第六段)	八四
五	ある人、法然上人に	(第九段)	八八
四	因幡の国に	(第四段)	九〇
三	五月五日、賀茂の競べ馬を	(第四段)	九一
二	春の暮つかた	(第四段)	九四
一	あやしの竹の編戸のうちより	(第四段)	九六
四	公世の二位の兄人に	(第四段)	九八
三	ある人、清水へ参りけるに	(第七段)	一〇〇
二	老来りて	(第四段)	一〇三
一	応長のころ、伊勢の国より	(第六段)	一〇四

六	龜山殿の御池に	(第五段)	一〇七
五	仁和寺に、ある法師	(第三段)	一〇九
四	これも仁和寺の法師	(第五段)	一一二
三	御室に、いみじき児の	(第四段)	一一四
二	家の造りやうは	(第五段)	一二七
一	久しく隔たりて逢ひたる人の	(第五段)	一二八
四	人の語り出でたる歌物語の	(第七段)	一三三
三	道心あらば	(第六段)	一三三
二	大事を思ひ立たん人は	(第五段)	一三五
一	真乘院に、盛親僧都とて	(第六段)	一三七
四	延政門院	(第六段)	一三三
三	筑紫に、なにがしの押領使など	(第六段)	一三三
二	書写の上人は	(第六段)	一三四
一	名を聞くより	(第七段)	一三五
四	いやしげなるもの	(第七段)	一三七
三	世に語り伝ふる事	(第七段)	一三九
二	蟻のごとくに集まりて	(第四段)	一四三
一	つれづれわぶる人は	(第五段)	一四四
四	世の中に	(第七段)	一四六
三	今様のことどもの	(第六段)	一四七
二	何事も入り立たぬさましたるぞ	(第七段)	一四九

禿	人ごとに、わが身に疎き事をのみぞ……	(第〇段)	一五〇
空	屏風・障子などの……	(第〇段)	一五三
空	うすものの表紙は……	(第〇段)	一五五
空	竹林院の入道左大臣殿……	(第〇段)	一五八
空	法顯三蔵の……	(第〇段)	一六〇
空	人の心すなほならねば……	(第〇段)	一六二
空	下部に酒飲まする事は……	(第〇段)	一六三
空	ある者、小野の道風の書ける……	(第〇段)	一六五
空	奥山に、猫またといふもの……	(第〇段)	一六七
空	赤舌日といふ事……	(第〇段)	一七〇
空	ある人、弓射る事を習ふに……	(第〇段)	一七三
空	牛を売る者あり……	(第〇段)	一七五
空	たふとき聖の……	(第〇段)	一七八
空	北の屋かげに……	(第〇段)	一八〇
空	高野の証空上人……	(第〇段)	一八三
空	寸陰惜しむ人なし……	(第〇段)	一八五
空	高名の木のほり……	(第〇段)	一八八
空	双六の上手と言ひし人に……	(第〇段)	一九三
空	明日は遠き国へおもむくべしと……	(第〇段)	一九五
空	今出川のおほい殿……	(第〇段)	一九六
空	寺院の号……	(第〇段)	一九八

〇	友とするにわろき者……	(第〇段)	二〇〇
〇	鎌倉の海に……	(第〇段)	二〇三
〇	唐の物は……	(第〇段)	二〇五
〇	養ひ飼ふものには……	(第〇段)	二〇八
〇	人の才能は……	(第〇段)	二一〇
〇	無益の事をなして……	(第〇段)	二一三
〇	人におくれて……	(第〇段)	二一五
〇	改めて益なき事は……	(第〇段)	二一七
〇	雅房の大納言は……	(第〇段)	二二〇
〇	顔回……	(第〇段)	二二二
〇	物に争はず……	(第〇段)	二二五
〇	高倉院の法華堂の三昧僧……	(第〇段)	二二八
〇	資季の大納言入道……	(第〇段)	二三〇
〇	花はさかりに……	(第〇段)	二三三
〇	花はさかりに……	(第〇段)	二三五
〇	よき人は、ひとへに好けるさまにも……	(第〇段)	二三七
〇	かの棧敷の前を、こころ行き交ふ人の……	(第〇段)	二四〇
〇	祭過ぎぬれば……	(第〇段)	二四二
〇	家にありたき木は……	(第〇段)	二四五
〇	身死して財残る事は……	(第〇段)	二四八
〇	悲田院の堯蓮上人は……	(第〇段)	二五〇

六	心なしと見ゆる者も……………	(第二四段)……………	二五四
九	人の終焉の有様の……………	(第二四段)……………	二六八
一〇	御隨身泰の重躬……………	(第二四段)……………	二六〇
一一	能をつかんとする人……………	(第二五段)……………	二六三
一二	ある人のいはく……………	(第二五段)……………	二六五
一三	西大寺の静然上人……………	(第二五段)……………	二六七
一四	為兼の大納言入道……………	(第二五段)……………	二六八
一五	この人、東寺の門に……………	(第二五段)……………	二七〇
一六	世に従はん人は……………	(第二五段)……………	二七三
一七	筆を執れば物書かれ……………	(第二五段)……………	二七五
一八	人間の営み合へるわざを……………	(第二六段)……………	二七七
一九	一道に携はる人……………	(第二六段)……………	二七九
二〇	年老いたる人の……………	(第二六段)……………	二八一
二一	さしたる事なくて……………	(第二七段)……………	二八三
二二	若き時……………	(第二七段)……………	二八六
二三	小鷹によき犬……………	(第二七段)……………	二八八
二四	ふれふれこゆき……………	(第二八段)……………	二九〇
二五	四条大納言隆親卿……………	(第二八段)……………	二九一
二六	相模守時頼の母は……………	(第二八段)……………	二九三
二七	城陸奥守泰盛は……………	(第二八段)……………	二九六
二八	吉田と申す馬乗りの……………	(第二八段)……………	二九七

二九	よろづの道の人……………	(第二七段)……………	二九八
三〇	ある者、子を法師になして……………	(第二八段)……………	三〇〇
三一	ある者、子を法師になして……………	(第二八段)……………	三〇〇
三二	「一」 たとへば、碁を打つ人……………	(第二八段)……………	三〇三
三三	「二」 一事を必ずなさんと思はば……………	(第二八段)……………	三〇四
三四	「三」 夜に入りて、物のはえなし……………	(第二九段)……………	三〇八
三五	くらき人の、人をはかりて……………	(第二九段)……………	三一〇
三六	達人の人を見る眼は……………	(第二九段)……………	三一三
三七	徳大寺右大臣殿……………	(第二九段)……………	三一六
三八	龜山殿建てられんとて……………	(第二九段)……………	三一八
三九	人の田を論ずるもの……………	(第二九段)……………	三二〇
四〇	よろづの事は頼むべからず……………	(第三〇段)……………	三二三
四一	秋の月……………	(第三〇段)……………	三二六
四二	平宣時朝臣……………	(第三〇段)……………	三二七
四三	最明寺入道……………	(第三〇段)……………	三三〇
四四	ある大福長者のいはく……………	(第三〇段)……………	三三三
四五	陰陽師有宗入道……………	(第三〇段)……………	三三七
四六	後鳥羽院の御時……………	(第三〇段)……………	三三九
四七	よき細工は……………	(第三〇段)……………	三四三
四八	園の別当入道は……………	(第三〇段)……………	三四三
四九	よろづのところがあらじと思はば……………	(第三〇段)……………	三四六

人の物を問ひたるに……………(第三段)……………三八
ぬしある家には……………(第三段)……………三五

一三 丹波に出雲といふ所あり……………(第三段)……………三五
一四 八つになりし年……………(第四段)……………三五

目 索 研 究 解 答
……………三五八～三六七
……………三六八～三七八

参 考 図 録

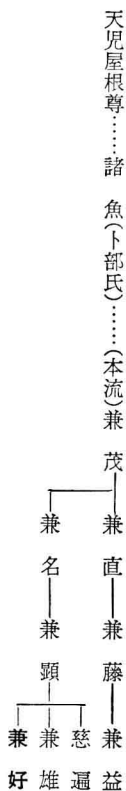
かげろう(三二) 格子・簀子・勾欄・長押・妻戸(三三) 透垣と羅文(三四) 關伽棚(三七) 神楽の舞人(四六)
笙・簫(四六) 追 儼(五五) 七夕祭(五五) つばな(七二) 塔婆・そとば(七七) おうち(九四)
足 鼎(二三) 破 子(二五) あかざ(三四) 文 車(二六) 奈良法師(六四) 双六盤(九三)
鏡(二三) しらかし(三三) まま子立て(三九) 御 帳(四四) 薬 玉(四四) 泔 杯(三〇)
浜 床(三七) 直 垂(三八) 紙 燭(三九) 七徳の舞(四〇) 庖丁師(四四) 狛犬と獅子(五五)

解題

一作者

「徒然草」は兼好法師の作である。「徒然草」の中には、兼好が書いたのだとは一言もことわっていないが、兼好が死んでからわずか三十年ばかりあとで生まれた正徹という歌人が写して伝えている「徒然草」に、「兼好法師作也」と書いてあること、同じ正徹の歌論書「正徹物語（上）」（徹書記物語）にも、「花はさかりに月はくまなきをのみ見る物かはと兼好が書きたるやうなる心ねをもちたるものは、世間にただ一人ならではなきなり。」と書いてあること、内容から見てもくいちがいのないことなどによっても、兼好の作と考えてさしつかえがないとされているのである。

兼好は、吉田兼好とも呼ばれる。卜部氏。その家は、代々神祇官として神事にあずかり、平安時代から藤原氏の氏神吉田神社の社務職を継いできた卜部家から分かれた家である。祖父は兼名と言ひ、右京大夫（右京職の長官）、父は兼顯と言ひ、治部少輔（治部省の次官）であった。長兄に大僧正慈遍、次兄に民部大輔（民部省の次官。少輔の上位）兼雄がいた。兼好の俗名は兼好であったが、出家してのち、それを音読して兼好と言ったのである。系図を示すと次のようになる。吉田兼好と呼ばれるのは出家前、洛東の吉田に住んでいたからである。



兼好の生涯については明らかでないところが多い。生まれた時期を一般に、後宇多天皇の弘安六年（一二八三）のこととしているが、それは、「大日本資料」に引いている「諸寺過去帳」の法金剛院の部に「観応元年四月八日、六十八歳死。」とあるところから逆算した推定による。観応元年（正平五年、一三五〇）に六十八歳で死んだというのが正確でないことは、「続群書類従」に収められ

ている「後普光院殿御百首」(二条良基の百首歌)に兼好が頼阿・慶雲とともに点を加えており、それが観応三年(一三五二)八月二十八日であることのほか、正平六年(観応二年、一三五二)の兼好の奥書のある「統古今集」が見られることによって証明されているから、兼好は、観応元年以後もなお幾年かは生き長らえていたと考えられるわけであって、観応元年に六十八歳で死んだという記録をもとにした生年も一応の見当であるにすぎない。「尊卑分脈」の卜部家系図によると、兼好は、蔵人となり、また、左兵衛佐(左兵衛府の次官)となった。家が、摂関・大臣・三位以上の家などの家務をつかさどる家司の身分(諸大夫という)で、兼好は、堀河家の家司となっていたが、後二条天皇の時代に六位の蔵人に加えられ、その六年の任期を終えて、二十五歳のころ從五位の左兵衛となつたと考えられている。そうして、三十歳ごろまでには出家していたらしい。古くは、「正徹物語」や「吉野拾遺」などの説に従つて、正中元年(一三二四)後宇多上皇の崩御が動機で出家したのだと言われていた。それによると、出家の時期は四十二歳ごろということになるが、それより四年も前の元応二年(一三二〇)に成つた「統千載集」に収められている「いかにして慰むものぞうき世をもそむかで過ぐす人に問はばや」の作者名が「兼好法師」となっていること、さらにさかのほつて、正和二年(一三一三)九月一日の日づけで書かれた、六条三位有忠から兼好への山城国山科小野庄の田地売り渡しの証文と添え状(大徳寺文書)に「兼好御房」と書かれている事実が明らかにされたことなどによって、今では、三十歳ごろまでには出家してしまつていたことが確かめられているのである。そういうわけで、出家の直接の動機などは明らかでない。出家後の兼好は、比叡山のふもとと修学院にこもり、また同山中の横川に隠れ住んだりしたが、晩年には、仁和寺の南双が岡を「無常所」(墓場)と定めて、そこで幾年かを生活したことがその歌集によつて知られる。なお、晩年、伊賀の国(今の三重県)国見山のふもとに住んで、そこで死んだという伝えがあるが、確かなこととわからない。

兼好の生没の時期は、以上のとおり明らかではないが、おおよそ七十年間の生涯のうち、四十年間ばかりは出家としての生活を送つたわけである。「徒然草」を見ると、無欲清閑の中で仏道に専念する生き方の尊さを説いているが、実際には、物質生活の上でもかなり豊かであり、交友関係の上でもかなり人ととの交渉の多い生活を送つていたものようである。歌集や金沢文庫の古文書によると出家前と出家後とにわたつて、関東にくだつたりしているし、趣味豊かな教養人として、また、歌人として、世に重んじられてもいた。わけても、歌人としては、二条為世の門下で、頼阿・淨弁・慶雲らとともに、四天王のひとりに数えられていた。「統千載」「統後拾遺」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新統古今」の諸集に合わせて十六首の入集を示しているほか、歌集も残しているくらいで、歌壇的な交際も多かったのである。もっとも、四天王のうちでは、劣つていたほうで勅撰集入集歌が、頼阿の四

十四首、淨弁の二十一首、雲雲の十七首に對してもつとも少なく、二条良基は、その著「近來風体」に、頼阿らの歌にくらべて、「兼好はこの中にもとりたるやうに人々も存ぜしやらむ。」と書いてもいる。もともと、「新古今集」のあとの低調な歌風にくだつていた時期のことでもあったので、当時の歌人としてかなり巧みではあったが、今からみて、味わうべき作に乏しいことはやむをえない。兼好が、文学史上輝きを放っているのは、そういう歌人としてではなく、「徒然草」の作者としてである。それは、「新古今集」時代の歌人であった鴨長明が、「方丈記」の作者として輝きを放っているのと似ていると言えらるだろう。

兼好は、後宇多天皇の時代に生まれ、後村上天皇の時代に死んでいることになる。もう少しくわしく言えば、その生涯は、後宇多（大覚寺統）・伏見（持明院統）・後伏見（持明院統）・後二条（大覚寺統）・花園（持明院統）・後醍醐（大覚寺統）・後村上・大覚寺統）の七代の天皇の時代にわたっていた。それは、一方に幕府勢力を置いて、大覚寺統と持明院統との兩派に分かれた皇統が、激烈陰惨きわまる政争をつづけた時代であった。兼好は、そういうきびしい時代に、はやく出家して、自由人としての生き方を選んだのである。その歌人的活動の面からみると、大覚寺統の人々とその交渉が多かったことが知られるが、一人間としては、対立抗争を越えた真実の世界に目を深め、そういう目に映ったさまざまなことがらを取りあげて、「徒然草」を生んだのである。

二 書 名

「徒然草」という書名は、序段に「つづねなるまに……」とあるのにもとづいて、一般に「徒然草」という漢字をあてているが、「つれづれ種」「つれづれ草」と書いた本があり、「寂莫草」という漢字をあてた学者もある。「くさ」は、「くさぐさ」の「くさ」で、おそらく「つれづれであるまに」心に映っていったいろいろのよしなしことを書いた本」という意で「つれづれぐさ」という書名がつけられたものだろう。作者兼好以外の後人によって与えた名だろうと言われているが、「正徹物語（下）」（清巖茶話）に「つれづれ草はまぐらのかさし材草子をつぎて書きたるもの也。」と書いてあるから、はやくから知られていた書名であることがわかる。

三 成 立

「徒然草」の成立事情については明らかでなかったで、江戸時代から今日に至るまでに、おもな説はおおよそ三転している。

はじめに行なわれた説は、俳人かたな名務支考の著「つれづれの讃」に引いてある「崑玉集」（三光院豪空著）に説いているところにもとづくもので、「徒然草」は、兼好の生きていた時には知る人がなかったが、兼好の弟子命松丸が、今川了俊に仕えるようになった

のちに、吉田で、壁にはられていたり、経文を写した紙の裏に書かれていたりしたものを見つけ出して来て、了俊とふたりで整えたのだというのである。

次に、かなり有力な説として支持されたのは、土肥^{つひ}経平^{けいへい}の著「春湊浪話^{はるみなみ浪話}」に見られるもので、「徒然草」は、はじめから兼好が書きまとめたものであるとする考え方に立って、人物の官名の書き方から推して、上巻は建武三年（一三三六）夏以前に吉田の双が岡で書かれ、下巻はそれ以後国見山で書かれたものだというのである。

しかし、今日では、「崑玉集」の説はたいへんいかがわしいもの、「春湊浪話」の説は推論の根拠を誤まっているものとして、いずれも信じられないものとされてしまっている。

今日、もっとも重んじられているのは、昭和になって、橘純一氏が、六年一月号の「歴史と国文学」（第四卷第一号）に発表された「徒然草著作年代について」という論文をはじめとして、深められた説である。橘氏は、「徒然草」の中に現われている人物の呼び方や官職の名などにくわしい調査を加えて、兼好が「徒然草」を書いたのは、後醍醐天皇の元徳二年（一三三〇）末から次の元弘元年（一三三一）秋までの一年に満たない間というところまでおしつめられたのである。ただ「侍従大納言公明卿^{だいにんごんこうめいけい}」（第一〇三段）のような記述があり、公明が極大納言^{ごくだになんごん}になったのは延元元年（一三三六）五月二十五日のことであるので、そういう事実の解決のしかたに問題があるし、西尾実氏がもつとはよい時期に書かれたものではないかと思われる段があると言っていられるような問題もある。橘氏が考えられた成立時期は、元弘の変からいわずに建武の中興につながる大動乱を目前にした時期だということになるが、その大動乱が導かれた動きは、すではやくからきざしていたわけで、そういう時代的緊張を身に受けていた作者から響き出していると言えるきびしいものが「徒然草」の中にこもっていることも確かである。

四 内 容

「徒然草」は、序段と第一段から第二四三段までとの二四四段から成り、第一三六段までが上巻、第一三七段からあとが下巻となっている。この段の分け方は、はじめからこのようになっていたわけではなく、北村季吟^{きたむらつきぎん}の注釈書「徒然草文段抄^{もたらな草ぶんだんしょう}」の分け方であって、一般にそれによっているのである。「徒然草」の内容の実際を少しく注意深く見ると、「文段抄」に見られる段の分け方がかなり自然であることがわかるが、中には、段が別にされていても内容的につながっているところがあり、段が一つにされていてもむしろ別にされたほうがよいのではなかと思われるところもある。

「徒然草」は、序段に「心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつ」けたものだと言っているとおりに、心に映っていくさまざまなことがらをとりとめもなく書きつけた作品であって、文字どおり随筆文学である。「徒然草」より前に生まれた随筆文学としては、平安時代に清少納言の「枕草子」があり、鎌倉時代の初期に鴨長明の「方丈記」があつて、いずれも名著であるが、兼好もそういう作品にならつて、名著「徒然草」を残したのである。取りあげている話題には、みずから直接に経験したことがらもあり、世の中を広く見わたして気づいたことがらもあり、読んだり聞いたりして知ったことがらもあり、創作したのではないかと見られるようなことがらもあるが、そこには、人間論があり、生活論があり、政治論があり、趣味論があり、自然論があり、芸道論があり、学問論があり、求道論があり、習俗論がある、といったぐあいだで、きわめて多方面にわたつた論述が見られ、味わいの深い教養書となっている。それらの論述の態度には、一つの論旨でつらぬいて述べている場合もあり、いろいろの論旨を重ね合わせからみ合わせて述べている場合もあり、心に触れた事実や説話を主観をまじえないでありのままに述べているだけの場合もある。読者を説得する気迫にあふれている場合もあり、ものの興趣をみずから楽しみ味わっている場合もあり、ものごとへのきびしい批判を加えている場合があるかと思えば、科学者のような目でものごとの分析を行なっている場合もある。

そのような随想の底にあるものは、中世というきびしい時代に受けとめられて生かされた東洋の知恵と言つてよいものだろう。清少納言は、平安宮廷社会に生きた一女性として、その身に備えていたすぐれた才気と洗練された感覚と鋭い観察力とによつて、「枕草子」という美しい作品を書いたが、兼好は、中世の下級貴族の中に育つた一男性としての身をはやくから自由の世界に置き、持つて生まれた豊かな人間味と身につけた広い教養と時代の動きの中で鍛えられた思考力とによつて、「徒然草」という深みのある作品を書いた。神に奉仕する家筋に育つたのだから、若い時から神道の思想にも親しんだはずであるが、「徒然草」を見ると、儒教や老荘の思想に親しんだあとがいちじるしく、出家した身として当然のことであるが、仏教思想がその主軸となつており、わけても、無常観は兼好独自のものの見方・考え方の妙味を生んでいる。無常観は、すでに「方丈記」や「平家物語」でも、その思想の主軸となつていたものではあるが、兼好にとっては、そういう作品が生まれたあととさらに激しい勢いでおし移る混乱の時代を体験していただき、道元らの禪的思想の影響があつたり、その身につけていた科学者のように深くものを見る目の反映もあつたりして、それが、仏道修行を説くよりどころとなつていただけでなく、簡素寡欲で安らかな生活の妙味を説くよりどころともなり、広く自然や人生の味わいを説くよりどころともなつていた。そういう兼好の目は、また、人間やものごとの新しい姿をありのままにとらえていく目にもなつていたのであつて、それが、「徒然草」の中に、新たにおし移る時代のいぶきを宿して新鮮な味わいを生んでいると言える。兼好

は、仏道修行を説いてまことにきびしいものを示しているが、しかし、かれは、すべての人を求道生活の中におしこめてしまうという考えではなかった。求道生活は、一つの理想的な生き方であって、一般の人々には、純粹の求道生活のあり方が無常の世に人間として生きる上のさまざまな指針を与えうるのだという考えであつたらしい。何よりも、「徒然草」の中に、求道生活を願つてもそれに徹底することがどんなにむずかしいものであるかを明らかにしている。兼好は、人間の世界がどんなに矛盾の多いものであり、人間の心理がどんなに微妙なものであるかをよく知つていたすぐれた人間理解者であつた。だから、「徒然草」には、あるいはしみじみと胸にこたえ、あるいは思わず笑いを誘われるといった、だれにもうなずかれ親しまれる話題がたくさんに取りあげられてあり、それは、時代を越えて、いつまでも、心あたまるものを持ち、しかも新鮮さを失わない。兼好は、古い世の物事への思慕の情も強く、そのことを「徒然草」の中で深い感動をこめて書いている。それは、平安時代に完成し円熟した伝統的なものを豊かに身につけていた人として、そういう古いものが荒々しくゆさぶられ、新しい調和の世界にはほど遠いという転換期に生きていた中世の教養人たちの心を代弁したものにほかならないが、一つには、きびしい時の流れの中にあつても価値を失わないものをたいせつにしたいという気持の現われでもあつただろう。「徒然草」の中にそういう気持が深々と宿されていることもまた、多くの読者の心をひきつけるはずである。完成し円熟したものは、いつまでも光りを失わない何かを持っているからである。

五 文 章

「徒然草」の文章は、平安時代の和文体、わけても「源氏物語」や「枕草子」にならつた一種の擬古文の文体を基調とし、それに、「方丈記」や「平家物語」や説話文学などで大きい特色を発揮した和漢混交文の文体を適度に織りこんで、古くてしかも新しいという独特の文体を生み出している。それは、平安時代の物語などの一場面にでもありそうな話題の場合には、より多く「源氏物語」の文体に近づき、「枕草子」の影響を受けているような話題の場合には、より多く「枕草子」の文体に近づき、論理を強く激しく展開するというような話題の場合には、より多く和漢混交文体に近づいているようであるが、説話的性格の強い話題の場合には、説話文学の文体に近づいている。そうして、全体として簡素な文勢を備えており、そういう文体のくふうが、「徒然草」の文章の魅力になつているということができる。しかし、「徒然草」の文章の魅力は、それだけではない。それは、説話文学から影響を受けたところがいちじると考えられるが、つとめて具体的な叙述が選ばれており、そこに、ことがらや人物が浮き彫りされて、ある場合には、すぐれた彫刻家の目を感じさせ、ある場合には、すぐれた演出家の目を感じさせるといふことである。